

ディナー・セットは、ハンガリーのヘレンドで生産されました。ヘレンド磁器は、中国製磁器のコピーを出発点に発展したものです。マクシミリアン皇帝は1864年、チャプルテペックの離宮で用いるため、このディナー・セットを注文しました。1867年、ヘレンド磁器工房の所有者だったモーリッツ・フィッシャーは、許可を得て、ヘレンド磁器宣伝のため、完成したディナー・セットをパリの万博に出品しました。展覧会が終了したとき、マクシミリアン皇帝は既に銃殺された後でした。このためセットはメキシコに送られず、今日に伝えられています。

15 トウン工房製、白と金のディナー・セット

白と金のディナー・セットは、1851年、フェルディナント皇帝のため購入されました。国民から「善良な皇帝」と呼ばれたフェルディナントは、1848年の革命に際して甥のフランツ＝ヨーゼフに帝位を譲り、プラハの王宮に移り住み、1875年に世を去りました。こうした背景から、プラハ王宮の調度品を新調するため、ボヘミアのクレスターレにあったトウン伯爵家の磁器工房に、白と金のディナー・セットが注文されたのです。デザインは、当時の最先端を行くものでした。それ以前のピーターマイヤー時代には、明快な直線を強調するデザインが一般的でした。ところが19世紀の半ばになって嗜好が変わり、ソフトでエレガントな曲線が主流となりました。豪華な黄金の装飾は、王朝の栄光を求める時代の潮流と合致するもので、この傾向はウィーンの世界でも顕著でした。

16 新しいフランス風センターピース

1848年の革命後、戴冠した若きフランツ＝ヨーゼフ皇帝の宮廷に新たな調度品を整えるため、1850年から51年にかけてパリに注文が出されました。これは「新しいフランス風センターピース」と呼ばれています。ブロンズに金メッキのセンターピースは、その豪華な装飾で、他のセンターピースを遙かに上回っています。巨大な燭台は、つる草や巻貝のようなロカイユ模様で飾られ、プットたちが遊び、野生動物や鳥たちが躍動しています。若きフランツ＝ヨーゼフ皇帝が常時、顧問官や大臣をディナーに招待したため、こうした大規模なセンターピースが必要となったのです。皇帝の母君であるソフィー女大公の影響で、宮廷にはバロックやロココが再導入され、この傾向は、とりわけ部屋の内装や家具類に顕著でした。食卓調度にも、旧体制への復帰が反映しています。

17 緑のリボンのディナー・セット(セーブル磁器)

緑のリボンが鮮やかなディナー・セットは、フランス王ルイ15世からマリア＝テレジア女帝へのプレゼントでした。これは大きな犠牲者を出したオーストリア継承戦争以来の敵対関係を克服し、新たな友好関係を築くための第一歩だったのです。波打って交差する緑のリボンがセットの主な装飾で、そのパターンはバロック時代の金細工に遡るものです。リボンの合間には、画家フランソワ・ブーシェの作品に基づく、繊細なロココ風シーンが描かれています。これらは、愛、ポエジー、音楽、絵画、彫刻などを象徴し、あるいはホーマーからモリエールに至る世界文学をテーマとしています。

このセットは、1738年フランスのセーブルに設立された王立磁器工房の傑作のひとつです。フリットと呼ばれる特別の素材は壊れやすいのが難点ですが、低音で焼き上げると、極めて鮮やかな色彩が生み出されます。鮮やかな緑の色彩は、このセット制作の直前に開発されました。また、二重のリボン模様は、マリア＝テレジア女帝へのプレゼントだけに用いられた唯一無二のモチーフです。

18 金色の穂をあしらったテリーヌ

1777年、皇帝ヨーゼフII世は、フランス王家に嫁いだ妹マリー＝アントワネットを訪問しました。ヨーゼフ皇帝の帰国に際して、500点に上る高価なセーブル磁器の数々が、オーストリアにもたらされました。その中には、明るいグリーンのディナー・セットや、4点の見事なテリーヌが含まれていました。テリーヌのうち3点は今日に伝えられています。オリオと呼ばれる濃厚なスープ用の丸いテリーヌと、他のスープ用テリーヌには、優雅なカーブの4つの脚部が付けられ、受け皿の上に置かれています。いずれも金色の穂で飾られ、円形のスペースには、果物、農産物、花、卵、海産物、園芸用品、農具などが描かれています。いずれも、多産と実り豊かな農作業を象徴するものです。

19 装飾ナブキン(スワン)、テーブルクロス類

ファンタジー豊かなフォルムを生み出すナブキン折りの技法は、残念ながら姿を消そうとしています。扇、魚、貝殻、スワン、アヒル、花など複雑に折りたたまれたナブキンは、とりわけバロック初期にディナーの装飾として珍重されました。これらの形が折り出されるためには、きめ細かい高級リンネルを素材とする特定サイズのナブキンが必要です。これに利用される皇帝家のナブキンは縦横1メートルの大きな正方形です。王宮には今日も、17世紀から伝えられる芸術的な折り方見本の数々が残されています。

20 黄金のディナー・セット

黄金のディナー・セットは、宮廷に残された最も豪華な磁器セットです。12人用のセットの全てが光沢のある金でコーティングされ、部分的には内部や裏側にも金が使用されています。エレガントな艶消しの模様は、古典古代の装飾タイルにヒントを得たものです。ウィーン磁器工房の傑作に数えられる黄金のディーナ・セットは、1814年に制作されました。これは、当時の歴史的事情によるものです。ナポレオン戦争の時代、国家的ディナーに用いられる金の食器は、殆ど熔かされ金貨となりました。その後1814年、フランツ皇帝のパリ滞在中、ウィーンで戦後処理に関する国際会議の開かれることが確定的となりました。ところが、金の食器は殆ど残っていませんでした。このため、少なくとも視覚的には公式ディナーに相応しい代替品を揃えるため、急速、黄金のディナー・セットが注文されたのです。

21 マイセン磁器のディナー・セット

1710年ドイツのマイセンにヨーロッパ最初の磁器工房が設立され、この工房は、その後長らくトップの座を保ち続けました。ここに見られるマイセンのディナー・セットは1775年頃の作品で、豪華な花柄が印象的です。そのフォルムと装飾には、バロック様式と歴史主義の要素が見られます。ふっくらしたテリーヌを飾る果物の図柄は、まだバロック時代の特徴を示していますが、壊れた果物カゴには、古典古代の装飾を取り入れた歴史主義への移行が見られます。

22 古いフランス風センターピース

1838年、フェルディナント皇帝は、ロンバルディア＝ベネト王国の国王となりました。ミラノでの戴冠式に際して、このセンターピースがパリに注文されたのです。生産者は不明です。当時、宮廷から外国に大口の注文が出される場合、注文は極秘で出されるか、宮廷長官を通じて行われるのが常でした。これは、ウィーンの生産者とのトラブルを避けるための方策だったのです。

センターピースは、ブロンズに金メッキされたものです。鏡のように磨かれたプレートは、燭台に立てられたロウソクの光を反映し、照明効果を高めました。装飾の彫刻や軽やかな唐草模様が、優雅な雰囲気を生み出しています。

23 パノラマ絵画の皿

1718年ウィーンで設立された磁器工房は、マイセンに続きヨーロッパで2番目に古いものです。当時人気の高かった磁器は、コレクションのための高価な贅沢品でしたが、皇帝家のディナーには不適當と考えられ、デザートにのみ使用されていました。その後、1800年前後のナポレオン戦争時代、宮廷銀器が貨幣に改鑄されると、事情が一変しました。1803年、フランツ皇帝は、120点からなる磁器のディナー・セットを注文しました。60枚の絵皿には、「パノラマの皿」と呼ばれる24枚の豪華なスープ皿が含まれています。絵柄には、ロマンチックで愛国的なモチーフが選ばれました。金色の縁飾りの中には、火を噴く火山、アルプスの氷河風景、ウィーンの建築などが見られます。夫々の皿には、古い銅版画をモデルに、最高の絵付師によって、オーストリア、スイス、イタリアの3つの風景が描かれました。作品が完成するまで5年の歳月がかかっています。

24 新しいフランス風センターピースのタンブール(アリーナ)

アトリウムには「タンブール」が展示されています。これはブロンズに金メッキしたもので、ポンポンを盛り付けてディナーのテーブルを飾りました。これは、若きフランツ＝ヨーゼフ皇帝の時代に制作された「新しいフランス風センターピース」のひとつです。

25 カール＝アレクサンダー・フォン・ロートリンゲン公の伊万里磁器

銀器コレクションには、1700年頃の東アジアの磁器を集めたユニークなコレクションがあります。これはロートリンゲン公カール＝アレクサンダーの収集したものです。カール＝アレクサンダーは、マリア＝テレジアの夫君フランツ＝シュテファン皇帝の弟で、1744年、マリア＝テレジア女帝の唯一の妹マリア＝アンナと結婚しました。結婚後、夫妻はブリュッセルに移り、カール＝アレクサンダーはハプスブルク領ネーデルラントの総督となりました。ここで彼は、熱心な美術コレクターとして膨大な作品を集めましたが、同時に借金額も膨大なものとなりました。彼の没後は、甥の皇帝ヨーゼフII世が遺産を整理し、ブリュッセルのコレクションの大半は競売にかけられました。もちろん、高価な伊万里磁器は、ウィーンの宮廷に移されました。崖の風景を示すセンターピースは、ウィーンの銀細工師の作品と推定されています。銀の木々に開けられた穴からは、香の香りが流れ出すようになっています。中国製のエナメルの果物の中にも、香料を入れることが出来ました。

26 マリア＝テレジア女帝のナイフ・フォーク

ケースに収められたナイフ・フォーク類は、マリア＝テレジア女帝の極めてプライベートな日用品のひとつです。これは女帝のため特別に仕上げられ、実際に彼女が使用し、宮廷でも旅先でも必ず食卓に登場しました。セットの内容は料理用ナイフ・フォーク、サービス・フォーク、スプーンで、更にエッグカップ、卵の殻割り付きエッグスプーン、塩入れもセットされていました。素材は純金で18世紀半ばに制作されたものです。漸く18世紀末から、大規模なシリーズ製品が開発され、12人用、24人用、36人用などのセットが生産されるようになりまし

た。この数字は12使徒に因んだものです。こうして皇帝一族の間でも、個々に仕上げられた特別品に代わり、同一デザインでシリーズ生産されたナイフ・フォーク類が、一般的となりました。

27 ウィーン宮廷の銀器シリーズ

古い時代の銀器セットが全く残っていないのには2つの理由があります。第一の理由は、銀器が常に厳しく点検されたためです。使い古されたり流行遅れになった食器は熔かされて、新たな食器に作り変えられたのです。第二の理由は、財政危機の場合に食器も銀貨に変えられたためです。とりわけ18世紀末からナポレオン戦争の時代には、軍事費調達のため、オーストリアに存在した殆どの銀製品が貨幣となりました。宮廷の調度品も、言わば戦争の犠牲となったのです。銀貨となった食器に代わって、ウィーン磁器工房の製品が導入されました。漸く1830年から1835年以降、少しずつ銀器が補充されるようになりました。先ずシュテファン・マイヤー・ホーファーに注文が出され、その後は「マイヤー・ホーファーとクリンコシュ」商会、あるいはヨーゼフ＝カール・クリンコシュが、ディナー・セットを生産しました。とりわけ、フランツ＝ヨーゼフ皇帝とバイエルン公爵家のエリーザベトが結婚した1854年以降、多くの銀器が追加されました。

28 英国ミントン工房のデザート・セット

ここに見られるのは英国ミントン工房のデザート・セットで、これは1851年ロンドンにおける万博でも、とりわけ豪華な展示品のひとつでした。116点からなる磁器セットは、その優れた芸術的仕上げで、賞を得ています。このセットをヴィクトリア女王が買い上げ、その一部をイギリスとオーストリアの友好のしるしとして、フランツ＝ヨーゼフ皇帝にプレゼントしたのです。上薬無しで素焼きした人物像とイギリス風クリームソースのカップは、オーストリアの宮廷では全く利用されませんでした。この豪華なセットは、非常に壊れやすい素材のため、実際の使用には向かなかったからです。

ここで銀器コレクションの見学コースが終わります。2階の「シィ・ミュージアム」と「皇帝の部屋見学コース」で、フランツ＝ヨーゼフ皇帝とエリーザベト皇后の生活空間をご覧ください。

29 皇帝の階段

皇帝の階段には、豪華な漆喰装飾と、金メッキを施した銅の花瓶が見られます。フランツ・ヨーゼフ皇帝も、この階段を利用していました。ホーフブルク王宮は600年以上、ハプスブルク皇帝の居城であり、神聖ローマ帝国の政治の中枢部でした。王宮は政府所在地であり、行政センターであると同時に、皇帝一家の冬の居城だったのです。宮廷の人々は18世紀以降、夏の期間を主にシェーンブルン宮殿で過ごしました。